第１回静岡大学将来構想協議会

１　開会

２　趣旨説明　前田企画局長

３　講演

「高等教育の現状、国立大学統合再編の全国的な動き」

教育ジャーナリスト　木村　誠　氏

４　議事

（１）静岡大学の大学改革案について

説明者　静岡大学長　石井　潔　氏

（２）意見交換

（篠原座長）

どうもありがとうございました。畳みかけるような議論でなかなか入りにくいのもあったかもしれませんが、この発表に対するご意見やご質問につきましては、この後の意見交換の時にまとめて行いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

では、改めまして議論に入っていきたいと思います。意見交換ですけれども、本日は第１回目ですので、先ほどの大学当局の説明も踏まえまして、委員の皆様のお考えやご意見などをご披露いただければと思います。時間に制限がありますので最初に全委員から３分ずつご発言をいただきます。そんなに厳しくやるつもりはありませんけれども、時間に制限がありますので是非３分以内ということで。それから事務局に関する質問については発言後にその場で応対いただければと思います。よろしいですか。一巡した後、もし、時間がありましたら許す限り適宜、ご発言いただければと思います。

では、いいですか。柴田委員から順に、反時計回りで、ひとつよろしくお願いいたします。

（柴田委員）

ご指名いただきました柴田です。私は、農学部、静大農学部の卒業ということで、この席につかせていただきました。私のときは静岡ではなくて、磐田市にあったキャンパスで卒業いたしました。当時は教養の部分では浜松に出向きまして、工学部と教育学部の一部の皆さんといっしょに授業を受けた時代です。そういうちょっと古い人間ですけれども、今、学長からいろいろご説明がありましたけれども、その中で一つ、二つ発言をさせていただきたいと思います。まず第一点は、統合に至るまでの経緯があまりにも大学関係、大枠の中だけでしか議論がされていないのではないかと。先ほども話がありましたとおり、静岡大学は地域に密着して地域の経済・企業と、大変、大きな役割を果たしているわけですけれども、そういった地域の自治体とか関係者との話し合いの場がなかったというのが大変残念です。大学が何か決められた構想、路線に沿って、特に教職員の皆さんから反対論があってもなかなかそれを聞き入れてくれない、そういうことも聞いております。私は同窓会の事務局をやっている関係で、そんなニュースも聞いていおりますが、いずれにしても決め方があまりにも一方的で、こんなことがあっていいのかと。特に静岡大学始まって以来の大変重要な改善を進めるわけですから、あまりにも拙速ではなかったと、そういうふうに思います。

それから二つ目には、統合の内容ですけれども、先ほども説明がありましたが、１法人１大学というのもあったのではないかと。静大に医学部が入ってくる。それから、二つ目には静岡大学と浜松医大そのものが大学として残る１法人２大学、これがごく自然体ではないかと。全国的にもそういうケースがあります。先ほど話があった静大の場合には、70年の歴史がある静岡大学を分割する、分離分割する、こういうことをしてもいいのかどうか。特に静岡大学の静岡ブランドといいますか、それを失うことだけではなくて、学生にとってはサークル活動や所属外の専門分野に触れることの重要性を無視しているのではないかと、そんなことも思いますし、私ども卒業生としましても、本当に総合大学が小さな大学になってしまう、多様性、教育の実践の場を失うということもありますし、本当に優秀な

学生、あるいは先生方が集まってくるのかどうか、心配になってなりません。先ほどの合意の意味合いはこうだという説明もありましたけれども、特にそれを目指すんだったら、何も分離分割でなくてもいいのではないか。そこを特に強調しておきたいと思います。これから、私は農学部ですが、農学分野ではグリーンバイオ技術やＡＩ、ＩＣＴ、それからスマート農業、大変、これは工学部ないし情報学部と共同でやらなければならない内容であります。したがって今は分離分割ではなくて、共同・連携ということのほうが優先するべきではないかというふうに思います。

時間の関係で端折りました。すみません。

（篠原座長）

ありがとうございました。

それでは、小長谷委員。

（小長谷委員）

静岡市副市長の小長谷です。よろしくお願いいたします。

今日は、本当にこの協議会を、静岡市も加わって共同設置ということでありますので、あらためて委員の皆さんに御理解、御協力をいただきまして、非常にうれしく思います。ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

それでは、着座にて、私の感想というか、意見を述べさせていただければと思います。

この協議会が、資料１にある設置要項にもあるように、ゼロベースで議論を行うというようなことなのかと思います。この御意見を、石井学長のほうは最大限反映していただけるということであるわけですが、先ほどのスケジュール等を見ますと、もう１月31日には文科省との徹底的対話が始まる、そういうこともありますので、本当にこの会議の議論が十分に反映いただけるのか、どうなのかな、というところが、ちょっと私は疑問に思っていまして、まずは、そういうところを少し考えていただければというふうに思っているところであります。

そして、この大学の在り様ということについても、静岡市にとっても地域の活性化ですとか、またはこれからの未来志向の静岡大学が本当に教育機関や研究機関として発展していくためには、いろいろな皆様の御意見があってもいいのではないかというふうに思っております。先ほど、学長のお話のように、浜松キャンパスと静岡キャンパスの実態に合わせたんだよ、という御説明をいただいたんですが、これからの情報化の中で地理的な部分はあまり考慮しなくてもいいのかな、ということもありますので。それでは、今までの御説明の部分が、１大学１法人ができないのか、なぜこういう部分ができないのか、または今回のアンブレラ方式がすぐれているのかどうか、そして現行の大学の枠組み、１法人の中で今の枠組みの中の大学の在り様で、今のような議論ができないのかどうか。そういう部分の、いろいろな、定性的、また定量的なデータをもとにした客観的な事実に基づいて、議論をして、皆様の合意のもとにぜひ進めていければというふうに思っております。

そのようなことから、今一度、そういった議論の仕方についてもこの場で皆様にご理解いただいて、進めていただければというふうに考えております。以上です。

（篠原座長）

ありがとうございました。

今井委員。

（今井委員）

静岡県立大学の副学長の今井でございます。今日は、突然、こういう会議に来まして、突然、発言を求められまして、何を言っていいのか分からないんですが、いくつか初めて聞いた話もありますので、それについて感想を述べさせていただきます。

まず、国立大学法人と、我々公立大学法人とだいぶ形態が違うことがよくわかりました。今度、新しい法人になりますと、法人の占める部分が非常に大きくな

るなあということがあります。たとえば法人の理事長が１名置かれて、大学の学長が２人おられた時に、１人の学長が理事長を兼ねることができるのか、ということがよくわからないところですよね。どういうふうに運営していくのか、というのが一つあります。また、連携法人について、少ししかお話になりませんでしたが、ざっといきまして、何か屋上屋を重ねるような形になって、事務的な量だけがすごく増えるのではないかという危惧が非常にあります。特に国立大学法人の方が、公立大学法人よりも、法人の力といいますか、マンパワーが十分にあります。そういう形で、我々の県公立大学法人の事務局の力で十分にやっていけるのか非常に心配しております。

　もう一つだけ感想を言いますと、大学を地域でまとめるのは本当にいいのかな、という気が、私はします。実は、静岡にもコンソーシアムがありまして、このコンソーシアム、ふじのくに地域・大学コンソーシアム、ここは今、積極的に他の地区のコンソーシアムと協定を結んで、他の大学の学生も受け入れる、単位互換ができるように進めようということで、進めています。実際に、もう、本学が提供する科目に、大阪の、南大阪のコンソーシアムの学生５名、大阪府立大学を含めて５名が受講に来て、単位をとっています。そういう形で、何も近いからよいという話でもないな、と思います。もう一つは、静岡大学農学部さんと研究協力をしていますが、実は浜松医大の人たちとも、我々の薬学部、100年の歴史がありますけれども、研究の協力は常に行っています。何も地域に狭くなる、という必要はない。さらに、今、インターネット教育が可能になっています。アメリカの大学ともつながって、例えばＵＣ　Ｄａｖｉｓ、カルフォルニア大学デービス校、それからオレゴン州の大学、そういうところとインターネットでつないだ形でやっています。さらに、そのインターネットの仲間として、上智大学とそれからお茶の水女子大学も加わって、別の地域の大学ともつながりまして、全国的に展開できるような形を目指しています。地域がすべてではない、まとまる意味で。もちろん地域は大事にしていますが、もっと広がりのある形で結び付けていけると、逆に地域にとっては非常にメリットがあるのではないか、という感想を持っています。以上です。

（篠原座長）

ありがとうございました。

それでは、伊藤委員、お願いします。

（伊藤委員）

着座にて失礼いたします。

国立大学法人静岡大学人文社会科学部法学科１年、伊藤高義と申します。私は三基商事株式会社の代理店で働きながら、夜間に大学に通う、夜間主学生として学ばせていただいております。また、プライベートでは、「大人が笑顔になれば、子どもの笑顔につながる」ということをコンセプトに、アフロをかぶりながら、清水駅周辺、三保松原を毎月１回ずつ、ウォーキングしながら、ごみ拾いをするという活動、地域つながりの活動や、「ともに育みたい清水のシビックプライド」をコンセプトに、地元の有志が集まって、清水区の食と酒の魅力を発信する、tomoe屋台祭りの企画運営などをさせていただいております。

さて、今回の静岡大学と浜松医科大学の法人統合、大学再編の現行、大学改革案について、お伺いしましたが、あと、さっきの設置要項のもと、ゼロベースで議論を行うということを前提とし、一人の静岡大学の学生として、一人の静岡県民、一人の静岡市民として、以下の２点の理由のもと、反対であります。

一つ目は、これからさらなる少子化が進むにあたり、人生100年時代を迎える現代において、これからの静岡大学の在り方が問われる中で、現行の大学改革案は、静岡大学の静岡地区大学に、発展的な将来が私には見えないという点でございます。浜松地区大学のみならず、静岡地区大学の産、学、官の連携の在り方、県立大学をはじめ、近隣の大学との連携の在り方も考え、静岡大学、浜松医科大学にかかわる学生や教授の明るい未来がイメージできる大学改革案を望みます。

二つ目は、静岡大学が２大学に分離し、浜松キャンパスと浜松医科大学を統合する統合再編案以外の他の選択肢として、浜松医科大学を静岡大学医学部とする１大学案、静岡大学を二分割しない現行の枠組みを維持した統合案など、現行案

以外の比較を是非、行っていただきたいという点でございます。私は、静岡大学の学生として、今後、未来を作っていく上で鍵となっていく情報学部、工学部のノウハウを生かしていきながら、今こそ静岡大学６学部がより連携をして、これからの静岡大学の在り方を構築するための第一歩であると思います。現行案以外の比較検討を是非、行っていただきたいというふうに願います。

最後になりますが、私は働きながら静岡大学で学べていること、そして６学部の国立大学法人静岡大学の学生であることに誇りを持っています。今回の大学、静岡大学将来構想協議会で行う議論が、将来の静岡大学の在り方を模索するチャンスであると、私は思います。是非、今以上にリカレント教育の推進をしていただき、二代、三代先の静岡県、静岡市のさらなる活性のため、学生とともに街づくりを推進していく静岡大学であることをイメージしながら、この協議会に携わっていきたいと思っておりますので、ゼロベースの議論を是非、お願いしたいと思います。今後この協議会で協議していく静岡大学の在り方が、地方の国立大学のよいモデルケースとなることを願い、私の意見とさせていただきます。以上です。

（篠原座長）

ありがとうございました。

静岡大学の丹沢委員、お願いします。

（丹沢委員）

静岡大学の丹沢でございます。当事者としては発言しにくい立場ですけれども、冒頭から厳しいご意見をたくさんいただき、ありがとうございます。私どもも今、ご質問いただいたこと、疑問等につきましては、正面から検討し、これまで進めてまいりました。今、ここで、すべてに答える場ではないと思いますので、それは差し控えたいと思います。次回以降、皆様のそういった疑問等に丁寧に、我々の考えてきたことをお答えしたい、というふうに思っております。あるいは、本日、一通り回った後に、時間があれば一部、答えられるところは答えていきたい

というふうに思っております。いずれにしましても、今、ゼロベースという言葉がございましたが、我々としましては、今、石井学長のほうから説明がありました内容を、あれをベースに考えるということではなく、それぞれの立場から考えていらっしゃることを忌憚のない御意見をいただいて、それを反映するという形で進めていきたいと思っております。徹底対話に関しましては、ここで徹底対話で文部科学省に我々の大学の立場で答えたことが、例えば第４期の目標計画に折り込まなければいけないとか、そういった拘束はございません。あくまでも、我々が次の第４期に向かって現在、考えていることを、文部科学省とディスカッションしていく、真に対話の場でありますので、もちろん、おそらく第４期の中期目標計画を作り上げるところに大きく影響してくる部分でありますので、その時間的な意味合いにおきましては、小長谷副市長から御指摘ございましたけれども、十分、我々としてはまだあるというふうに思っておりますので、我々は十分それを聞く構えでおりますので、いろいろな御意見を聞かせいただければというふうに思っております。それで、今、学長のほうから話が合った中で、スライド９ページの中で、未来社会デザイン教育研究推進機構という、委員の方々はおそらく、初めて聞かれた言葉だと思いますけれども、これはかなり規模の大きなものを現在、想定しているところであります。今、私がこの責任者として、この機構の立ち上げで、関係の教職員とともに準備を進めているところですが、こちらにつきましてですね、おそらく、今、伊藤委員から質問がありました、発展的な静岡大学の将来というところでけっこう関わってくる大きな問題となってまいりますので、ここにつきまして、できれば第２回目の会合で、私の方から20分なり30分なり説明する時間を、機会をいただければ、もう少し静岡大学の今後の取組というところが明確になっていくのではないかな、というふうに考えております。いずれにしましても、この後、何回かこの会合が開かれると思いますけれども、私どもとしては精一杯、ご理解いただけるように説明をしたいと思いますし、疑問点等あれば、率直にお出ししていただければというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

（篠原座長）

ありがとうございました。

野田委員、お願いします。

（野田委員）

ヒューマンデライトの野田と申します。今日、皆さんと初顔合わせでございますので、今回この委員に加えていただいた背景ですとか、自己紹介と、それと今回の構想の中で、私自身が考えていることを話させていただきたいと思います。

私は元々静岡市の出身でございまして、大学から東京に出まして、これも本当に今の静岡市の課題でもあるんですけれども、大学で東京に出たら、そのまま東京で就職して、ずっと東京で暮らしていました。私は今、このヒューマンデライトという自分の会社は、地方創生を応援する会社だという位置づけで、2010年に起業したんですけれども、その時点で地方創生をやるのであれば、自分自身が地元に戻らなければいけないということで、会社自体の登記も静岡市にいたしましたし、住民票も静岡市に移して、ちゃんと静岡に移そうということで、活動しています。実は、そんな関係もございまして、静岡市の創生会議というのが、もう３年前からスタートしていますが、第１回目の創生委員に加えていただき、いろんな議論を静岡市とさせていただいております。それと、もう一つ、実は私の息子が成人をしたんですが、小学校、中学校と、静岡大学附属の小学校、中学校に通わせていただきまして、今は国立沼津高専に通っているんですけれども、その関係で、国立の学校、静岡大学というブランドに対しては、ものすごく、自分自身も思い入れがありながら、そんな思いで地元で過ごさせていただいておりますけれども。今回の話の中で私が思いますのは、先ほど冒頭に前田企画局長のほうからお話がございましたが、今回の統合、１法人複数大学という構想に関しましては、地域の自治体との連携というのを、非常に文科省としても意識をしていて、これが伝わっていると思います。そういう意味においては、本件のお話というのは、静岡市の皆さんと協議をしていかないと、全く方向性としてはうまくいかないであろうな、と思うのが一つあります。そういう意味におきましては、特に静

岡市としては、私自身がそうだったのですけれども、大学で県外に出てしまいました。それから、帰ってきませんというのが、地方創生においての人口減少においては非常に問題があります。ですから、やっぱり地元の子供たちが、地域の特徴を生かした静岡大学というブランドの下で勉学でき、そこから地域の企業に就職して、その地域のために働いていくという、そういった流れを作っていかないといけないな、というふうに思っております。今回、分離分割という形に聞こえてしまうかもしれないんですけれども、この静岡キャンパス、静岡大学、もともとの静岡大学では農学部を中心に、本当に日本に誇れる学部がこちらにあるわけですから、そこに対しての評価と、さらなる浜松キャンパスとの連携という方向性を見出していけば、決して静岡大学のブランドが損なわれるということはないと思いますので。逆に、今後を見据えた静岡大学のブランドをいかに地域で作っていくか、というところに関して、皆さんの協力をいただくのがいいんではないかなと思います。経営という立場で考えますと、今回に関しては、１法人の、法人の在り方がすごく大事になってくるかな、というふうに思っていまして、これは静岡市に拠点を置き、静岡市の御協力の下、法人経営もしっかりとしていく、さらにこの静岡大学が発展していくための法人経営をしていくという視点で、何卒、皆様の議論等をしていただけるとよいのかな、というふうに思いました。

すみません、長くなりましたが、意見とさせていただきます。

（篠原座長）

ありがとうございました。

日詰委員。

（日詰委員）

日詰でございます。よろしくお願いいたします。

私は、名簿にもございますように、静岡市の市民自治推進審議会の会長という立場と、それから、もう一つは、この並びにもなりますが、大学の教員の一員としても参加させていただいているということで、ちょっと複雑な立場になります

けれども、そういうことでございます。

それで、実はこのような開かれた場で、静岡大学の今後の在り方について、皆様といろいろな形で議論ができるということは、大変有意義なことだというふうに思っております。そういう観点で申し上げますと、今、私の前に御発言いただきました委員の皆様は、いろんな角度から大学の法人統合、法人統合というよりは大学再編について非常に御心配の向きもあったり、またむしろ大学の側からすれば、それを推進するという立場での御発言もあったように伺っております。

私は、やはりこのような協議会を設けられたということになりますから、是非、大学側としても、この場で述べられていること、発言されていることに心を閉ざさないで、門戸を閉ざさないで、固く閉ざさないで、是非、開いて聞いていただきたい。そして、もしその中で大事なものがあるんであれば、それを是非、取り入れていただきたい、というのが切実な思いであります。いろいろな御懸念があるということは、私たちも同じように懸念を持っているわけでございます。その中でも、とりわけ静岡大学は昨年、1949年６月１日からスタートしたこともあって、70周年を迎え、2022年につきましては、浜松キャンパスも、それからも静岡キャンパスも、特に人文と理学部、いわゆる旧制静岡高等学校の流れを組むその学部で100周年を迎えるということになります。その間、地域の中で培ってきた静岡大学の名前、そしてそこで養成された人材、それらの方々が非常に多方面でご活躍をされている。加えて、その間、培ってきた研究力、そしてそれらのものが世界に発信されて、静岡大学という名前の中で評価されてきたということはおそらく否めない事実であると思っております。今回の再編にあたりまして、そういった観点でいえば、とがった部分をさらにいっそうとがらせる、それは確かに大学としては大事なことだと思っているんですけれども、その部分のところがどうも浜松地区の方に目立つ。しかしながら、静岡キャンパスの方の側にあっても、実は今後の発展の芽というものがたくさんあるわけでして、それは先ほどの石井学長からの説明にもあったと思うんですけれども、それをさらに伸ばしていくという観点で言えば、今も相互に連携していくという視点がないとまずいわけですよね。だから、最近は文科省の書類の中にも「共創」という言葉がたくさん使わ

れています。つまり、今までのような協働という視点だけではなく、広くいろいろなステークホルダーの方々と連携して新しいものを作っていく、あるいは新しい価値観をその地域に埋め込んでいくということが今後大学の使命として求められるんだろうと思うんですね。そういう観点からすれば、静岡地区にある４学部と浜松地区の２学部が、より一層いろんな形で連携する面というのは、これからどんどん、どんどん芽生えてくる可能性があると思います。そういったものを、大学を分けてしまうことによって、そういった発展の可能性の芽を摘む可能性があるのではないかという懸念を私自身は持っております。例えば、先ほど、10ページの、石井学長から御説明のありました、資料の10ページのところに、大学間連携のことについては、今後、制度改正が進められて、より容易に大学間連携が進むのではないかとおっしゃっていらっしゃいますが、逆に大学内の議論ではよく出てくる発言といたしまして、よく浜松のキャンパスの文化と静岡のキャンパスの文化は違うのではないかと、そういうようなことがよく言われるわけです。そういうことに関しては、先ほど小長谷副市長からも話がありましたように、こういった距離感というものは、いろいろな意味で技術の革新によって解消されていく可能性があるわけですから、その辺りはあまり心配することはないのではないかと思います。むしろこういった大学間連携の中において、大学が別々になってしまったら、今、同じ大学の中で非常に意思決定に時間がかかる部分もあるかもしれませんけれども、大学がバラバラになってしまって違う文化を作ってしまうよりも、いっそうより豊かな連携の可能性というものが進む可能性もあるわけです。ですから、そういった可能性の部分を我々は大事にすべきではないかと思っておりますし、私自身もそのような考え方の立場にたっております。法人統合に関しては、先ほどのこの６ページのスライドの中にもございましたけれども、法人統合に関してはやはり新しい医学という領域が、静岡大学と連携するということになってくるわけですから、これは静岡県全体にとっても非常に良いことだというふうに思っています。そこの部分と、それからあと、県は我々の持っているポテンシャル、そういったものがうまく定期的に連携していくことによって、静岡県全体の均衡ある発展のために静岡大学も貢献していくということが大事

だと思います。その中にあってやはり、大学を分けてしまうということの課題性といいましょうか、問題というふうにいうと怒るだろうと思いますので、その辺はいいませんけれども、その課題性というものを、やはりもう少し見つめなおしていただくことが必要ではないかと考えています。以上です。

（篠原座長）

ありがとうございました。

それでは、松永委員。

（松永委員）

座っての発言をお許しいただきたいと思います。

静岡商工会議所の松永と申します。よろしくお願いいたします。

この協議におきまして、やはり地域経済の発展にどのような影響といいますか、効果をもたらすのかという視点を持ちながら、参加したいと思いますし、私は、静岡市の葵区生まれで、大学４年間以外は静岡で就職し、静岡で子育てをしたという、いわばほぼ生粋の静岡市民だと思いますので、そういった静岡市民としての立場での発言をしていきたいと思います。そうした中で、先ほどの石井学長さんの話の中で６ページの法人統合で目指すことで、法人のメリットはある程度理解できたんですけれども、やはり皆さんおっしゃるように静岡地区の大学のメリットがよくわからないというのが正直なところです。８ページのところで新たな方向性ということで、いくつか方向性は示されているものの、これがもう少し具体的なものになればわかるのかもしれませんけれども、８ページから９ページに移った段階でその関連性がわからなかったので、具体的なことがはっきりわかればと思います。ただ、やはり皆さん言われているように、１法人２大学という選択肢もあるだろうし、８ページ、９ページのように新たな大学を、人生100年時代を見据えて新たな学部を創設するという考え方もあるのかなという、いろいろ検討された結果、今回のような提案を出されたと思いますので、今後、そういった検討の経緯、いろいろなパターンが元のメリット、デメリットをお示しいただ

きながら、こういった今回のような提案がなされたという説明を欲しかったなと思います。

それともう一点は、検討事項の県立大学等との連携というところをうたっているのですが、先ほど学長さんのお話にもありましたが、ＣＯＣ＋というものが、今、静大、浜松医大、静岡文化芸術大学、県大と連携していると思うんですけれども、これが確か今年で終わりだと思うんですけれども、ＣＯＣ＋とこの今、検討事項に挙げられているこの連携について、どういう関係性があるのかということを少し知りたいなと思いました。

（篠原座長）

はい、ありがとうございました。

あと、どうしても意見、例えば質問なんかがありましたら、時間がありますけれども、もしありましたらぜひお願いします。それと、それについては今日は回答まではもてないと思いますので、また宿題みたいな形でお願いすることになると思いますが、大学の方でよろしくお願いします。

いかがですか。何かありますか。

（小長谷委員）

今、各委員さんの御意見を伺いまして、まだまだ議論が足りないということであります。この再編の議論というものは、皆さんの意見を聞きながらきっちり進めるべきでないかと考えています。したがいまして、統合・再編という、１月31日の徹底対話は、４期の目標に向かってもので、このものとは若干違うよという話もありましたが、まだ少し誤解を与えることもございますので、この場の協議会の議論をきっちり受けてもらって、それを踏まえた形での対応を是非お願いしたいなあと。それが、また皆様のご理解をいただく早道というか、そのように考えられますので、是非、そういう議論をこれから進めていっていければというふうに思いますのでよろしくお願いいたします。

（篠原座長）

わかりました。

座長が意見を言ってよいかわかりませんけれども、私は、松永さんが最後、まとめてくれたような感じになったと思いますけれども、本当に単純に言えばメリット・デメリット、特に地元自治体にといいますから、地元自治体にとってのメリット・デメリット、クリアにならないと賛成も反対もできないんではないかと。例えば法人統合は賛成だけれども、大学分離、あるいは再編は反対みたいなことは、いろいろ出てくると思いますので、ぜひ、皆さんの中で後で御質問ありましたら書面でも結構ですので、次回までに回答できるよう形で、是非、大学本部の方にお願いしたいと思います。

この協議会については、冒頭事務局からも説明がありましたように、文科省の通知にある地元自治体等の理解を得るということで立ち上げられたものですので、先ほど松永委員がおっしゃったとおりだと私は思っています。それから、小長谷委員からは、こういうことを単に議論ではなく、定性的、定量的という形でもう少し具体的にという話だと思うんですけれども、議論をしたらどうかということでもありました。ただ、今日の話としては、皆さんが、もちろん、まだ納得できるとかそういう話ではないと思いますけれども、理解を得られたというふうには私も考えてはおりません。次回は、今回説明された大学当局案を含めまして、丹沢委員からも話がありましたけれども、未来社会の関係についても説明があろうかと思います。それらの内容を基に、改めてどういう統合、あるいは法人統合だけなのか、統合ということについて改めて議論していきたいと思います。

また、本日、坂本委員と瀧委員が欠席されておりますけれども、その人たちへも今日の話を伝えなければなりませんと思いますし、あと、文科省からの通知に基づいて立ち上げたということなので、文科省にも多少、議論の行方みたいなところをお伝えしなければいけないのかなという考えもあります。協議会につきましては、静岡市が静岡大学からの申し出を受けて立ち上げたということなので、報告については、もしよろしかったら静岡市さんにお願いしたいし、委員として小長谷さんにお願いしたいと思いますがよろしいでしょうか。

（小長谷委員）

この場で皆さんのご了解をいただければ、そのような方向で考えたいというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

（篠原座長）

皆さんよろしいでしょうか。報告というよりは、今回、今日は皆さんの御意見の方向みたいな形だけだと思いますけれども。それと、事務局、欠席のお二方にもちゃんと連絡するようにお願いします。もし、今日、意見をいっていないので何としても言いたいという方いらっしゃいましたら、それも書面でもいいですから、この報告をするとともに、一緒に振ってみてください。

どうもありがとうございました。本日はどこまで協議が進んだかちょっとわかりませんでしたけれども、いちおう協議を含めた議題は以上となります。委員の皆様には本当に円滑な進行にご協力をいただきましてありがとうございました。

それでは進行、司会にお返しいたします。

（３）その他

５　閉　会